



年の初めのパスカル「パンセ」
—研究者は一本の葦にすぎない、
しかしそれは考える葦である—

日付が2015年から2016年に変わり、また新しい年を迎えた。2016年の1月もあつという間に過ぎてしまい、今は暦の上では大寒というらしい。北国の格段に厳しい寒さも納得だ。窓の外の日映いばかりの雪景色を見ていると、今年こそは良い年になりますようにと祈らずにはおられない。年の初めにあらためてそんな気持ちになったのは、年をとったせいかも知れないが、一方でこの4~5年いろんなことが起きすぎたからだと思う。東日本大震災、原発事故、異常気象、エボラなどの感染症の大流行、度重なるテロ、大量の難民発生など、我々が予想さえ出来なかったことが地球上のあちこちで起きた。そして年が変わっても解決の糸口さえ見えていない。

一方研究室では、我々は日々、新しい生命現象を見つけ、そのメカニズムを解明することに躍起になっている。ある現象（例えばウイルス感染症）が起きる時には原因（例えばウイルスと宿主の相互作用）があつて、その因果関係を明らかにすることによって、生命現象（ウイルス感染症）のメカニズムが機械の電気回路図を見るように明らかになり、それを制御することによって生命現象を変化させることができる（例えば感染症を治すことができる）のではないかという考えだ。病気が治せないとしたら、未だメカニズムが十分解明されていないから、研究者はもっと頑張れ、というわけだ。これは真実を含んでいる。しかし最近ちょっと違う側面があるかも知れないと思うことがある。研究をすればするほど、生命現象の深淵さに驚かされ心が躍るが、生命現象の全容を大海だとすると、自分の

研究は海岸近くを小舟で遊んでいるに過ぎないように感じることがある。

ところで、この正月休みに、パスカルの『パンセ』断章という本に出会った。パスカルの原理で有名な数学者で、哲学者でもあるパスカルが、メモ書きのよう書き留めたものを本にしたものだ。ここで、パスカルは、「理性の最後の行動は理性を超えるものが無限に存在することを認めることである」、つまり人間の理性には限界があること、因果関係を突き詰めても理解できない真実があることを説いている。琴線に触れるものがあつた。我々は、新しい発見をすると、新しい病気のメカニズムを解明した、治療に繋がる可能性がある、論文を書くことが多い。それ自体は間違っていないし、その研究成果から新しい治療法が生まれたこともあつた。しかし一方、それは真実の一つの側面であること、他の未だ解明されていない側面があることを忘れてはならないと思う。

大震災や原発事故、エボラなどの感染症の発生、大量の難民問題に対して、想定外という言葉をししばしば耳にするが、研究者が簡単に想定外と言ってしまうのは、あまりに情けなくはないだろうか？ 研究者に想定できなくて、いったい誰に予測できるというのだろうか？ 最近起きているこれらの出来事は、自然現象や生命現象、世の中の出来事に対して、我々が全ての真実を理解したような気になってはいないか？ ということ問いかけているように思う。一方で、近年の生命科学研究を取り巻く環境には厳しいものがあり、出口の見えたものが重視される傾向が強まっている。特に地方大学において基礎的な研究をじっくり進めるのは容易ではない。しかし、いろんな逆境に葦のように揺れながらも、生命現象の本質を解明すべく、これでもか、これでもかと考え続けて行きたいと思う。最後に、我々に対するエールのように感じた『パンセ』の一節を以下に引用させていただく。「人間は一本の葦にすぎない。自然の中で最も弱いもののひとつである。しかしそれは考える葦である。」

（雪だるま）

参考文献：パスカル著「パンセ」、中公クラシックス。